

佐藤幹夫(編著)西 研 滝川一廣 小林隆児(著)

『発達障害と感覚・知覚の世界』

2013年 日本評論社 A5判 237頁 定価(本体2400円+税)

松崎真実\*

本書は知的障害や発達障害における体験世界と感覚・知覚のあり方の特徴と繋がりについて、「人間と発達を考える会」開催の講演会で西、滝川、小林がそれぞれ話した内容を佐藤が編著、書き下ろしを加えたものである。内容としては、西によるフッサール知覚論からの感覚・知覚とはどのような現象であるかから始まり、滝川が発達障害児における感覚、知覚の世界を記し、その世界が他者や社会との相互的な関係の中で生成すること、その具体的なケアの方法論を小林が挙げている。その最後に佐藤が社会的支援の方法についてある入所更生施設での経験を元に述べている。

私達のいる現実社会が、「まず現実があり、それを私達はそれぞれに受け取っている」(現実→意識)とところから、「意識体験がまずあり、それが現実、夢、想像などへ分類されるとみなす」(意識→現実)としてみる事を、哲学者のエトモント・フッサールは提案した。西はその現実知覚の特質を、四つの条件、そのもの自身が与えられているという感触、生身でありありとしていること、これまで自分の中に形づけてきた現実像との調和、他者と共有できるとしている。四番目の「他者との共有」は極めて重要で、幻覚や幻聴などではこれが三番目の「自身の中に形づけられてきた現実上との調和」と衝突するとしている。そして西は発達障害における困難さが、他者の知覚と自分の知覚が調和することで客観的世界があると思えるという、共有された信念を作り上げるときに生ずると述べている。

滝川の論ずる第二章では、胎児が子宮の中の世界から人間社会へと生まれ、世界を知る仕事をする、それは自己流の歩みではなく、社会に共有されている意味や約束に沿って成長していくとしている。つまり、認識の発達と関係の発達は相互作用しながら、精神発達に結びつくという。赤ちゃんは最初に寒い、暑いといった感覚を共有、その後、楽しい、寂しいといった情動を養育者と共有し、その後に関心を共有する。そして、社会的、共同的な存在へと育っていく。10か月ぐらいで赤ちゃんは大人の模倣を始め、1歳ぐらいになると、授乳し、おむつを換えてくれる存在をママと呼ぶ。未分化な不快感覚に押されて受け身に泣いていた赤ちゃんが、養育者との感覚の共有を通して「からだのレベル」で根付かせていくという。このからだのレベルでの土台がたまずくケースが、養育者の側にあるのが児童虐待、子どもの側にあるのが発達障害であると滝川は言う。

言葉の発達が始まると、それはより顕著になる。言葉は他者との共有が容易で、感覚を整理し、捉えやすくするからである。また、言葉が言葉通りでない意味を持つ言外の意が身について初めて、私達が社会的な言語をものにしたことになるという滝川の説には同調する。このような事があるからこそ、遅れを持った人は不安と緊張の世界に生きているという。さらに感覚の分化が不十分であるため、遅れをもったのがどの時期かによってその程度に差はあるものの、世界の捉え方に違いが生じるとしている。滝川は画家の山下清を例に挙げ、認知的な映像記憶と独特の色彩感覚、見たままに緻密に表現するという画風にその高い感覚性を結びつけている。このような高い感覚

---

\*お茶の水女子大学大学院博士課程

性がしばしば過敏で混乱的な体験世界となり、その世界を生きていく発達障害児は「一つの発達のあり方」を追っているとしている。そして、彼らの強いこだわり、自己刺戟行動などが彼らの混乱的な体験世界への対処努力であるとしている滝川は遅れをもつ人々は「高い自立性」を強いられた世界を生き、孤独であるから、判で押したような自立支援をあげるのではなく、依存を通して安心を身に着けるような支援をするべきだとしている。

小林が精神科医として、関係という視点から知覚を話す第三章も非常に興味深い。小林は実際の臨床現場でどのように「原初的知覚体験」のありようが見られるのか、具体的な例を多く挙げている。その中の一例で、高機能広汎性発達障害の子どもと母親と面談した経験が挙げられている。小林は、頑張り屋で知的、子どもに対して気を張って生きてきた母親に同調の気持ちを示したあとで、「遊びのないハンドルでずっと運転してこられたような感じがしますね。」と語りかける。その途端、面談の雰囲気がガラリと変わった。小林の言葉に、母親の警戒的な態度が緩み、子どももそれを察して、母親にまわりついた。このような介入は、原初的知覚で感じたからこそ可能であった事であり、相手のそれまでの対人的構えを一気に緩めることにも繋がると小林は述べている。大人が子どもの「原初的知覚」、つまり目の前にいる子どもの世界に即した捉え方をすることで、子どもとの関係づくりの大切な部分が出ていくとしている。発達障害は、どのような能力に障害があるのかというより、対人関係の難しさが基盤にある場合が多いという。対人関係は、その一方のみを取り上げて検討するのではなく、他方の側も一緒に取り上げ、そこにどのような関係の難しさが認められるのかを見つめることが必要だと、小林はいう。そのために一番重要なことは、自分自身の存在を理解することだと記している。

最終章で佐藤が記すのは、「かりいほ」という知的障害を持つ青年男女を対象とした入所更生施設である。更生施設なので、他害行為を行った人たちを対象にしている。佐藤は三人の入所者を例に挙げる。過半の利用者が、生活を失くし、家族や人を失くし、居場所を失くし、かりいほに辿り着く経緯、そしてかりいほはどのような支援をしているのかを記している。佐藤は、入所者の心の中を解きほぐす鍵を施設長の言葉に繋げる。「生きにくさは理解されないから生きにくさなのです。理解するには付き合うことです。」

本書は発達障害の感覚・知覚の問題を捉えているが、同時に他者理解の基本的な姿勢も捉えている。本書は発達障害の知覚に知見を深めることができる良書であり、一読をお勧めする。